

城下町淀における空間構造とその変容

2 回生 乃木健太郎

I. はじめに

古代より木津川・宇治川・桂川が合流し交通の要所であった淀は、平安時代には鳥羽・草津と並んで平安京の外港として機能し、江戸時代には京都護衛の地として、また水陸交通の要所として重要視されてきた。城下町淀は河川に挟まれた川中の島であったが、藩主の転封の繰り返しにより、城下町の姿も変化していった。しかし近世城下町淀の研究は少なく、近世城下町淀の景観の復原を取り上げた論文としては、近代の河川改修工事資料をもとに、近世末の城下町淀の町の形態を復原した小林大祐（1988）の研究しか挙げられない。小林は近世淀城下町における町人町の分布と宿駅・港湾施設の配置を明らかにしたが、城下町の時代別の景観の復原、そして景観の変化については概略的な分析にとどまっている。また、小林の分析では武家屋敷に関する復原は行われていない。

そこで本稿では、まず淀藩の地理的特徴を踏まえた上で、近世の城下町淀がどのように変容したのか、どのような構造をしていたのか分析する。また、分析方法は GIS を用いて作成した 3 時代の絵図の復原図を用いることとする。

II. 淀藩の特徴

1) 近畿地方における淀藩

江戸時代において京都は都であり、特別かつ重要な場所であった。京都御所から南南西 14km に位置していた淀藩は山城国唯一の藩であり、伏見城の廃城後、伏見にかわる京都守護の要地として、軍事上重要な位置を占めていた。そのため近畿地方のほとんどの藩では、歴代藩主は譜代大名であった（図 1）。近畿地方において 10 万石以上で廃藩置県まで歴代譜代大名が治めた藩は大和国の郡山藩（151,288 石）と近江国の彦根藩（20 万石）、山城国の淀藩（102,000 石）のみである（幕末における石高を表記）。その他の藩は 5 万石未満の藩が点在している。淀藩は幕末では 102,000 石であるが、藩領が 8ヶ国 25 郡にまたがって散在していたことも特徴である（表 1）。

淀は軍事面だけでなく、水上交通・陸上交通で便利な位置にあり、要所であった。陸上交通では大坂から京都を結ぶ京街道の途中に位置し、水上交通では宇治川、桂川、木津川 3 川の合流点にある（図 2）。江戸時代は貨物船と客船が別個に扱われ、そのうち客船は関所を通るときに示す通行証「過書」が必要であった。1603（慶長 8）年に徳川家康が「淀船」

凡例

譜代大名

石高

- 5万石未満
- 5万石以上 - 10万石未満
- 10万石 - 20万石未満
- 20万石以上

外様大名

石高

- 5万石未満
- 5万石以上 - 10万石未満
- 10万石 - 20万石未満
- 20万石以上

琵琶湖

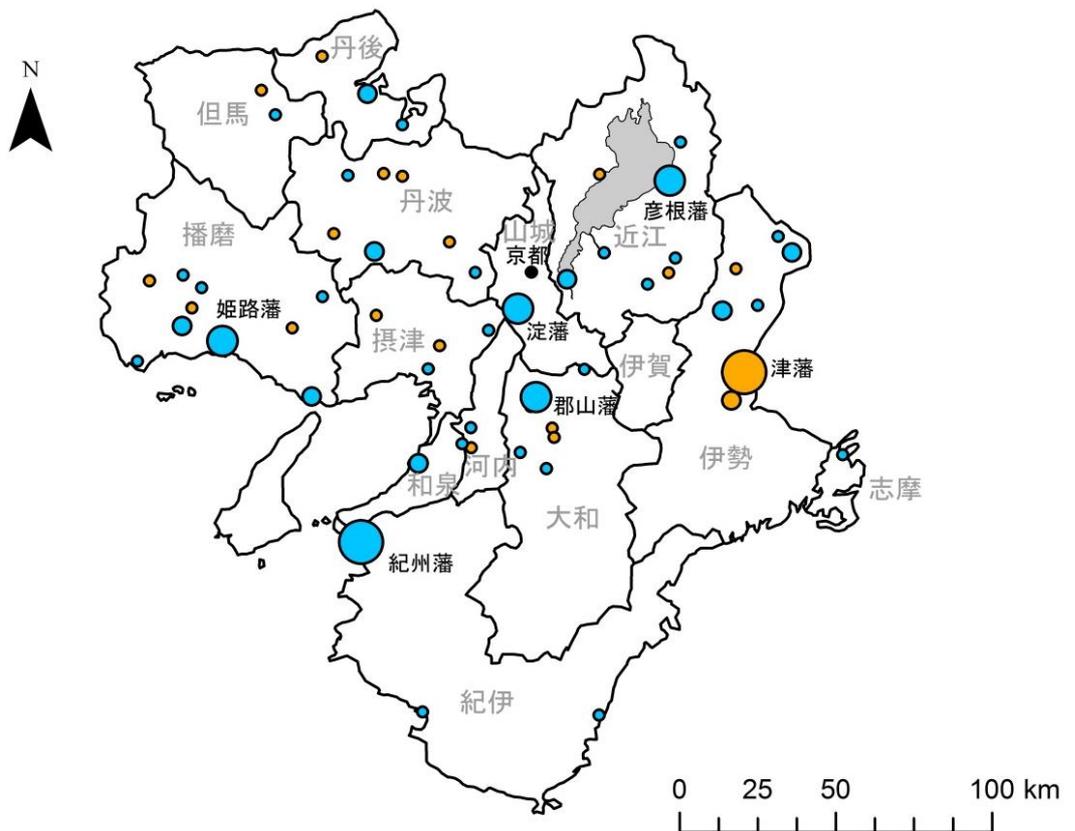


図1 幕末における近畿地方の大名の分類・藩庁の位置と石高
 (『藩史大事典』第5, 6巻より作成)

表1 幕末における淀藩の藩領の分布

国名 (府県名)	郡名
山城国 (京都府)	久世, 綴喜, 紀伊, 相楽
摂津国 (兵庫県)	嶋下
河内国 (大阪府東部)	若江, 渋川, 高安
和泉国 (大阪府南西部)	南, 泉, 日根
近江国 (滋賀県)	野洲, 栗田, 甲賀, 浅井, 伊香, 滋賀, 蒲生, 高嶋
下総国 (千葉県北部)	香取, 印旛, 埴生, 相馬
常陸国 (茨城県)	真壁
上野国 (群馬県)	勢多

(『藩史大事典』第5巻より作成)

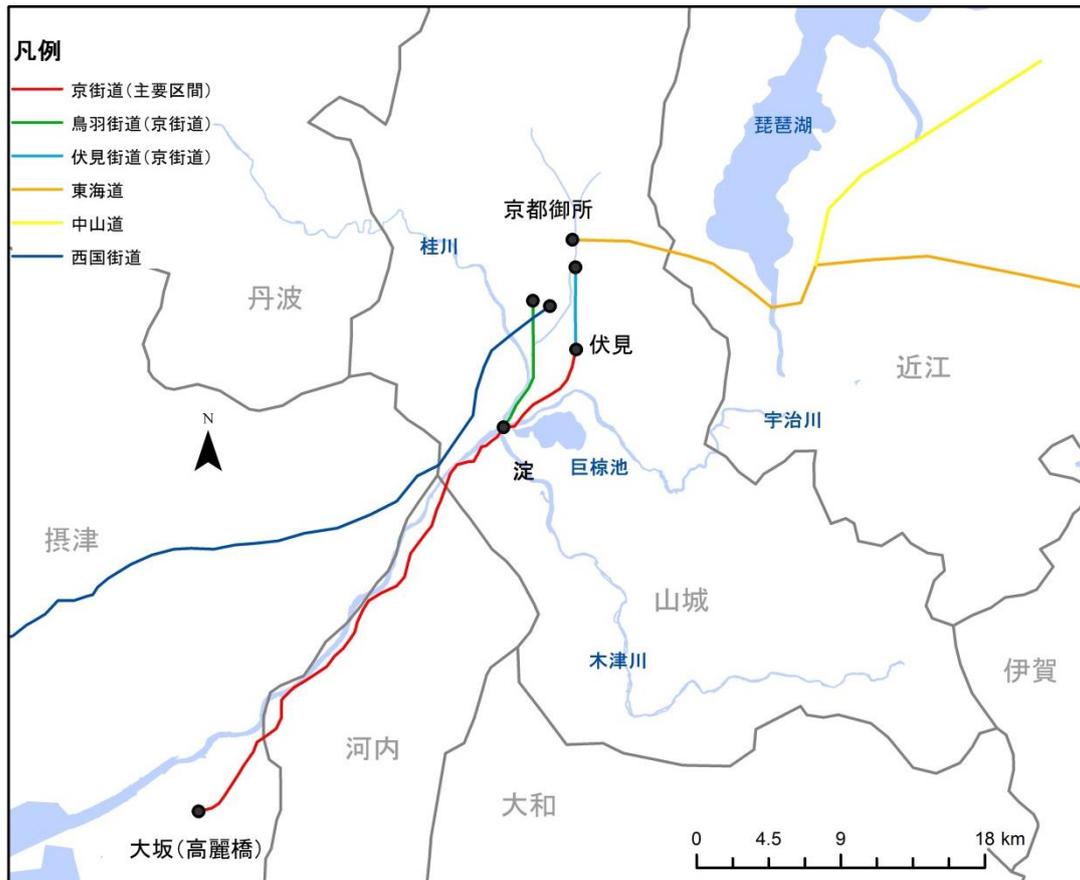


図2 淀周辺の主な街道と河川
 (『伊能大図 山城 河内・摂津』より作成)

や「二十石船」、「三十石船」などに与えた朱印状に該当する船を「過書船」と呼び、同年淀藩には過書船の番所が置かれるなど、当時水上交通の点でも幕府から重視されていたことがうかがえる。

2) 淀藩の概要

淀藩は、伏見城廃城の1623(元和9)年、松平(久松)定綱が遠江国掛川から入封を命じられ、3万5000石で立藩された。淀藩の位置は水陸交通の要地であり、京都護衛の役割も担っていた。定綱は1633(寛永10)年美濃国大垣へ転封となり、永井尚政が下総国古河から10万石で入封した。永井氏は尚政の後尚征に相続したが、1669(寛文9)年丹後国宮津へ転封し、石川憲之が伊勢国亀山から6万石で入封。その後備中国松山へ転封し、戸田光熙が美濃国加納から6万石で入封した。戸田氏は1717(享保2)年2代目光慈が相続とともに志摩国鳥羽へ転封となり、伊勢国亀山から松平(大給)乗邑が同じく6万石で入封した。乗邑は大坂城代から老中へと異例の出世を遂げ、同年8月に下総国佐倉へ転封し、

表 2 淀藩の歴代藩主

	藩主	藩主就任・退任年	石高
1	松平 定綱	元和 9～寛永 10 (1623～1633)	35000
2	永井 尚政	寛永 10～明暦 4 (1633～1658)	100000
3	永井 尚征	明暦 4～寛文 9 (1658～1699)	73600
4	石川 憲之	寛文 9～宝永 3 (1699～1706)	60000
5	石川 義孝	宝永 3～宝永 7 (1706～1710)	〃
6	石川 総慶	宝永 7～宝永 8 (1710～1711)	〃
7	戸田 光熙	宝永 8～享保 2 (1711～1717)	〃
8	戸田 光慈	享保 2 (1717)	〃
9	松平 乗邑	享保 2～享保 8 (1717～1723)	〃
10	稲葉 正知	享保 8～享保 14 (1723～1729)	102000
11	稲葉 正任	享保 14～享保 15 (1729～1730)	〃
12	稲葉 正恒	享保 15 (1730)	〃
13	稲葉 正親	享保 15～享保 19 (1730～1734)	〃
14	稲葉 正益	享保 19～明和 8 (1734～1771)	〃
15	稲葉 正弘	明和 8～安永 2 (1771～1773)	〃
16	稲葉 正躰	安永 2～文化 3 (1773～1806)	〃
17	稲葉 正備	文化 3～文化 12 (1806～1815)	〃
18	稲葉 正発	文化 12～文政 6 (1815～1823)	〃
19	稲葉 正守	文政 6～天保 13 (1823～1842)	〃
20	稲葉 正誼	天保 13～嘉永 1 (1842～1848)	〃
21	稲葉 正邦	嘉永 1～明治 4 (1848～1871)	〃

(『藩史大事典』第 5 巻より作成)

入れかわって下総国佐倉から稲葉正知が 10 万 2000 石で淀に入った。以後、稲葉氏が在封し廃藩置県を迎えた(表 2, 表 3)。歴代藩主は初代藩主である松平定綱は親藩、永井尚政以降は全て譜代大名であり(表 2)、幕府が淀藩をいかに重要視していたかがうかがえる。また、永井尚政や松平乗邑、稲葉正邦は老中に就任しているなど幕府の役職についていることも特徴である。

表3 淀藩の年表

年	藩主	出来事
元和9 (1623)	松平	松平定綱, 入封。淀城築城開始
寛永3 (1626)	〃	淀城完成。8月秀忠, 家光, 上洛時に淀城に入る。
寛永10 (1633)	永井	永井尚政, 入封。
寛永14 (1637)	〃	木津川川違と城下町の拡張 (翌年まで)
寛文9 (1669)	石川	石川憲之, 入封。木津川川違と城下町の拡張。
宝永8 (1711)	戸田	戸田光熙, 入封。
享保2 (1717)	松平	松平乗邑, 入封。
享保8 (1723)	稲葉	稲葉正知, 入封。
宝暦6 (1756)	〃	元和築城天守, 落雷にて焼失。
万延元 (1860)	〃	藩校明親館, 淀城内に開校。
慶応4 (1868)	〃	鳥羽伏見の戦いで敗走する幕府軍の入城を拒み, 城下炎上する
明治4 (1871)	〃	7月, 廃藩置県に伴う淀県 <small>（現京都府）</small> の成立。11月, 京都府に編入。

(『藩史大事典』第5巻より作成)

Ⅲ. 城下町淀における時代別の空間構造とその変容

1) 城下町淀の歴史

淀城の歴史は1588(天正16)年, 現在の伏見区納所に豊臣秀吉が築いた淀城が始まりである。中世以来の淀の津としての水上交通に加え, 京街道や伏見街道の陸上交通の整備により交通の要となった。しかし1594(文禄3)年には旧淀城の廃城が決まり, その機能は全て伏見城に移された。江戸時代になると伏見城の廃城に伴い, 交通の要としての機能は淀に戻り, 現在の伏見区淀本町に城下町が築かれた。

1623(元和9)年より松平定綱(3万5000石)が築城を始めた淀城は, 宇治川, 桂川, 木津川の合流点にある島の上に城下町を築いた(図3)。1633(寛永10)年には新たに永井尚政が10万石で淀藩に入封したため, 家臣の住居の確保は重要な課題であった。また, 毎年の洪水による被害などから, 1637(寛永14)年から翌年まで木津川の流路を北から南西に付け替える川違を行った。さらに元々の川底を埋め立て外高嶋として新たに武家屋敷地区を造成し, 課題であった家臣の住居を確保した。1637(寛永14)年の川違によって近世の城下町は完成し, 1868(慶応4)年の鳥羽伏見の戦いまでその原型を残したまま明治を迎えた。藩主の転封や入封の繰り返しや地形の影響などにより, 城下町の骨格がどのように変容するのか絵図をもとにした復原図を用いて考察する。

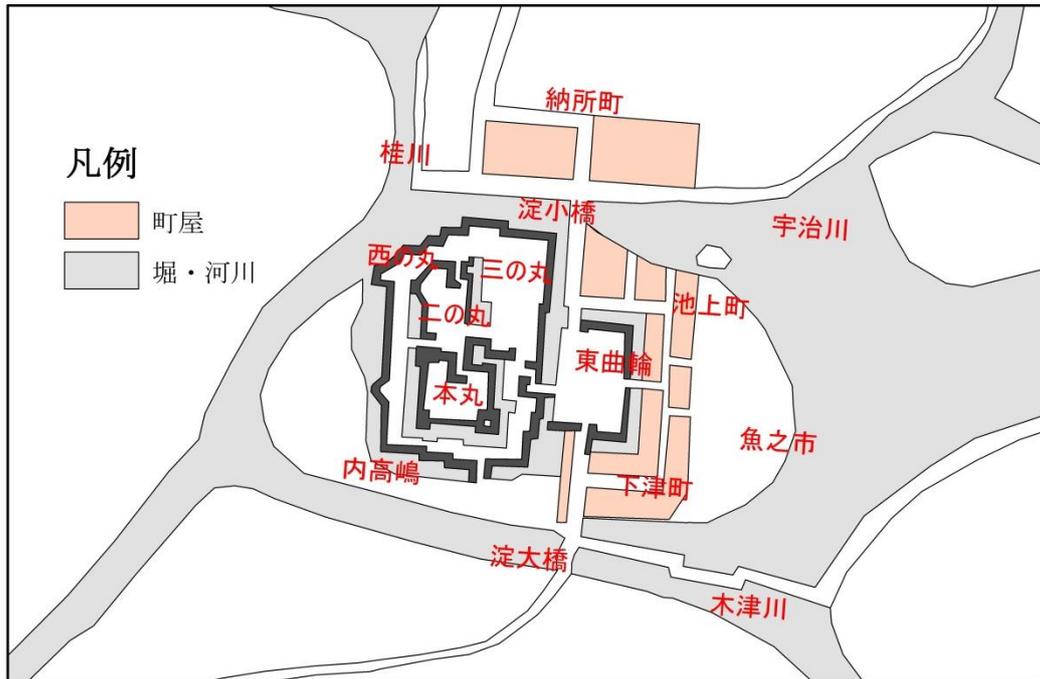


図3 松平期における城下町淀（広域）
 (岡山大学池田家文庫『山城淀城之図』より作成)

2) 城下町淀における絵図を用いた GIS マップの作成

城下町の変容と構造を本研究では次の3葉の城下町絵図を利用する。①1623～1633（元和9～寛永10）年「城砦淀城圖」（『淀城温故会第九回報告』、以下、松平期とする）、②1633～1669（寛永10～寛文9）年「淀惣絵図」（西尾市岩瀬文庫所蔵、以下、永井期とする）、③1750（寛延2）年「山州淀城府内之図」（稲葉神社崇敬会所蔵、以下、稲葉期とする）である。3葉の城下町絵図が示す景観年代は城主の転封・入封により、城下町の拡大など大きな変化がみられた時期である。このような理由により上記3葉を選出し、GISを用いて城下町の復原を行った。

GISは城下町絵図に描かれた情報をGIS上で電子化することが可能である。GISを用いることで位置情報を付与でき、武家屋敷の面積を求めることが可能であるため、本研究では電子化の方法にGIS（ArcMap10）を利用した。

3) 城下町の土地利用とその変容

図4は松平期の復原図である。1623（元和9）年に松平定綱が築いた淀城下町は他の時代に比べ小規模であり、城下町の構造も複雑ではなかった。本丸には1626（寛永3）年に

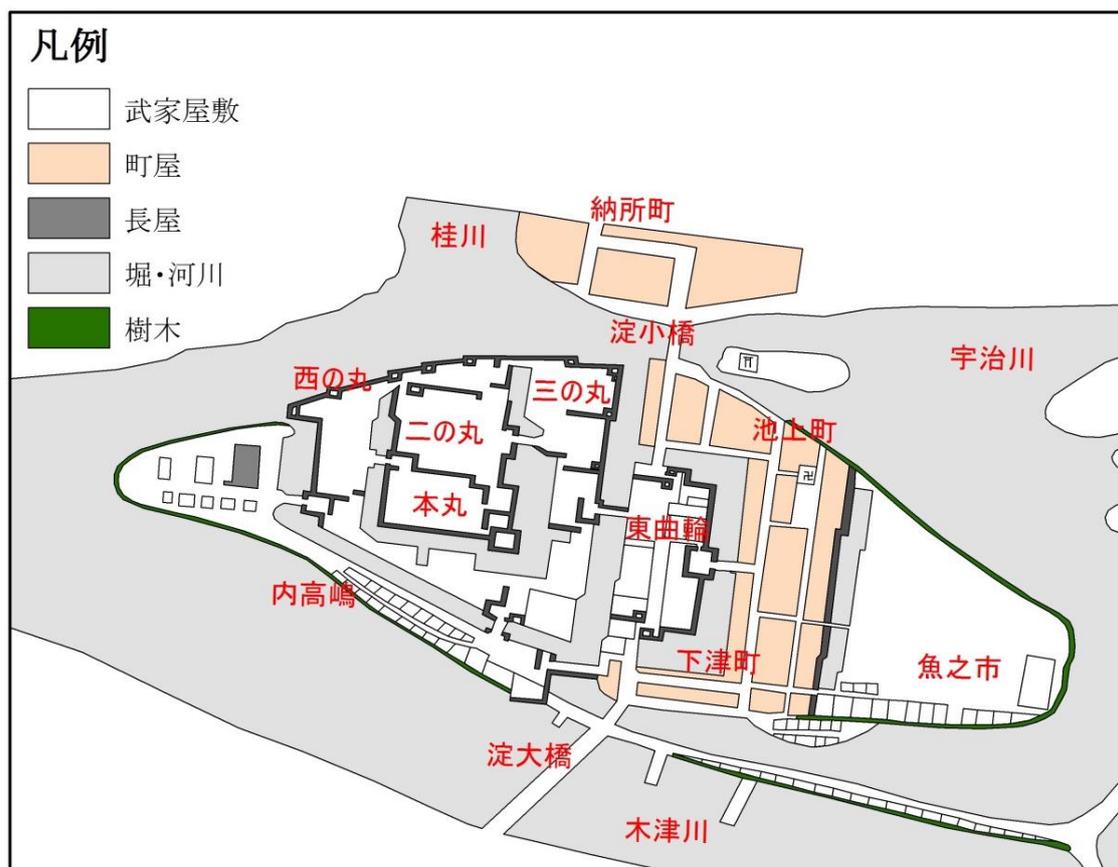


図4 松平期における城下町淀（詳細）
 (『淀城温故会第九回報告』所収『城砦淀城圖』より作成)

秀忠・家光が上洛した際に宿所として用いた御殿、二の丸には藩主居住用の御殿があり、築城前には三の丸に過書船奉行を務めた河村与三右衛門の屋敷があったとされる。上級武士は東曲輪に居住し、その他の武士居住地は内高嶋と魚之市に限られた。町人町は北から納所町、池上町、下津町に限られ京街道に沿って分布していた。堀は内堀、外堀、大外堀とあり、本丸と二の丸は内堀で囲まれ、三の丸、西の丸は内堀と外堀に、東曲輪と内高嶋は外堀と大外堀に囲まれていた。図4から内高嶋・魚之市・木津川の北の堤防など河川に沿って樹木が植えられており、護岸目的に植えた水防林であることが予想される。また、かつて淀川堤の街道には、三十石船唄に「淀の上手の千両の松は、売らず買わずの見て千両」と歌われた松並木があり、このことからこの樹木は松であったと考えられる。図5は永井期の復原図である。松平定綱から永井尚政に城主が変わる際に城下町は大きな変化がみられた。永井尚政は松平定綱の時代よりも家臣が多かったため、新たに武家屋敷の造成をして町を拡張することで家臣の住居を確保した。木津川の川違により、武家屋敷では新たに外高嶋ができ、木津川右岸堤防に足軽長屋、町人町として新たに新町ができた。また、新町の東に淀屋屋敷の記載があり、敷地面積は本丸の約1.6倍の面積を有していたことが明

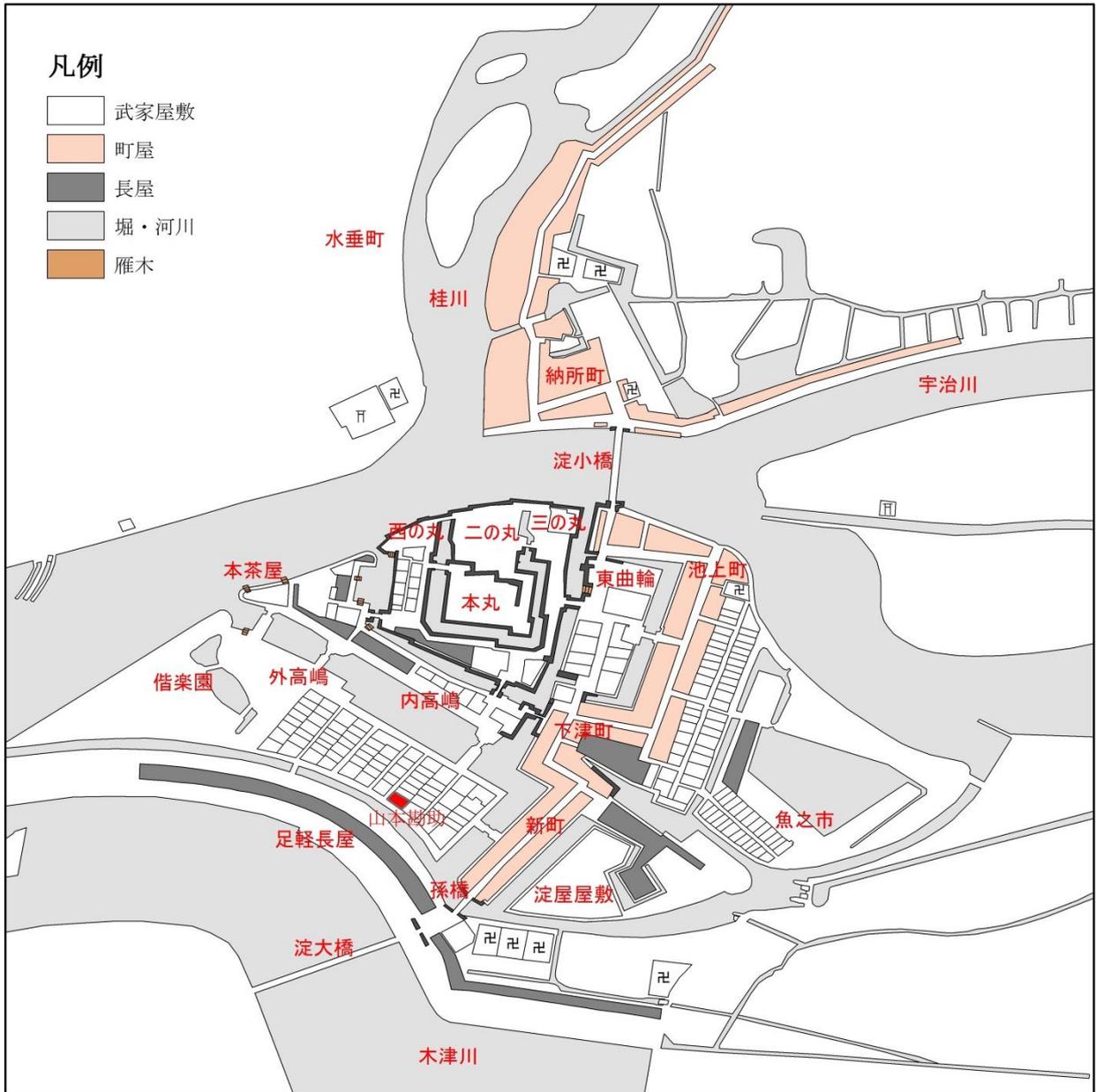


図5 永井期における城下町澁
 (西尾市岩瀬文庫所蔵『澁惣絵図』より作成)

らかとなった。淀屋とは江戸時代、大坂で繁栄を極めた豪商であり、全国の米相場の基準となる米市を設立し、大坂が「天下の台所」と呼ばれる商都へ発展する事に大きく寄与した。また、外高嶋の武家屋敷の一面には山本勘介の記載がある。この人物は戦国時代の武田信玄の軍師といわれる山本勘助の子孫である。永井尚政は澁に入封する以前は下総国古河で8万9100石余の大名であったが、1633(寛永10)年澁に10万石で入封したため、石高が増えた分多くの浪人を雇っている。外高嶋の武家屋敷に記載されている山本勘助の子孫は石高の増加により、永井尚政に仕官した家臣の一例である。

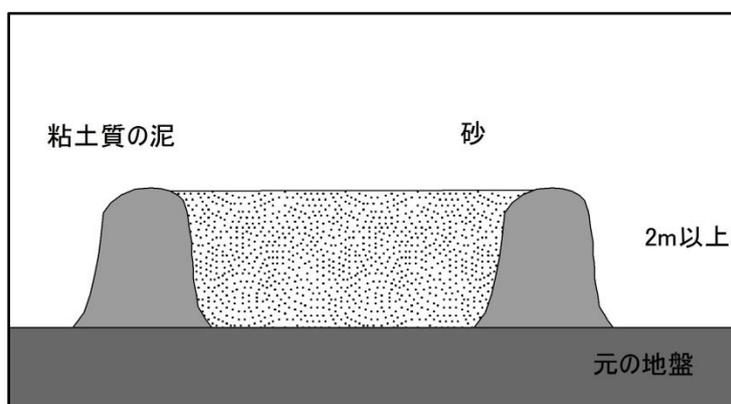


図6 城下町拡張における埋立地の断面
(京都市埋蔵文化財研究所での聞き取りにより作成)

淀屋屋敷の南に位置する3つの寺院(西から高福寺, 長圓寺, 東雲寺)は1654(明暦元)年に焼けたため, 1657(明暦3)年に代官町(下津町と池上町の裏)から淀大橋のたもとに移された。また淀城三の丸には「亀之助様」の文字がある。この人物は永井尚征の四男直種で, 亀之助は直種の幼名である。この直種は1658(万治元)年に淀で生まれた。これら淀大橋のたもとの寺院や「亀之助様」の記載, そして永井尚政が1658(明暦4)年に隠居したことを踏まえると, 永井期の絵図は二代目の尚征(7万3600石)の時代のもものと推定される。

内高嶋の西端には「本茶屋」とかかれた茶屋が新たにでき, 外高嶋の西に「偕楽園」という庭園を造ったとされる。京都大学建築系図書室所蔵の「淀城大絵図」には「本茶屋」と同じ位置に「古茶屋」と書かれており, その真向かいの外高嶋に新たに永井尚政のためと考えられる「隠居屋敷」の記載があった。内高嶋と外高嶋の西側は, 宇治川と桂川の合流地点に面した景色の良い場所であり, 永井尚政のための文化的な空間となっている。

永井期において城下町の拡張した埋立地の断面は, 図6のような構造をしている。元の地盤の上に粘土質の泥を盛り, その中に木津川の川底の砂を敷き詰めた。城下町の拡張によって新たにできた新町は2mの盛土がされており, 松平期から存在する東曲輪では元の地盤より1m盛土されている。淀城下町は河川による水害を考慮し, 場所によって高さは異なるが城下町全体が盛土されている。この盛土は実際に淀の町を現地調査した際に現在も残っていることが確認できた。

このように永井期の城下町の拡張により幕末まで続く淀城下町の骨格が完成したといえる。

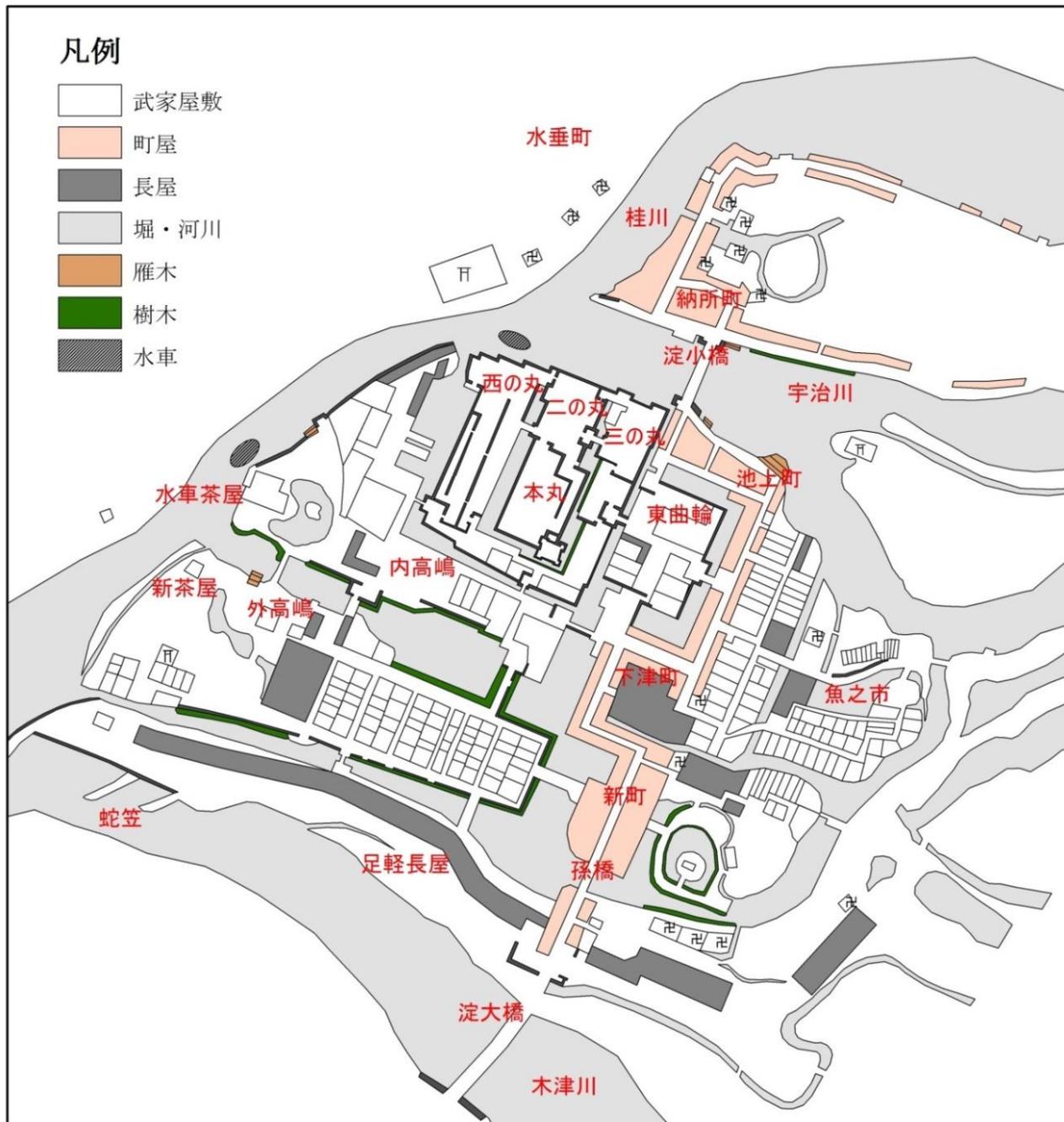


図7 稲葉期における城下町淀
(稲葉神社崇敬会所蔵『山州淀府内之図』より作成)

図7は稲葉期の復原図である。稲葉期の絵図は1750(寛延3)年4月の年記と、「洪貢翁藤原守業文林子蟻洲(本名渡辺善右衛門源守業)」の署名があり、稲葉氏の馬具方、御軍方などを務めた渡辺家に伝わるものである。50年以上前の永井期の城下町と比べ細かな変化はあるが、城下町自体の骨格はほぼ変化していないことがわかる。多少ではあるが新茶屋

の南や、魚之市などで武家屋敷の拡大がみられる。稲葉期の絵図は他の絵図に比べ多少精度は劣るが、情報量の多いことが特徴であり、建物の名称や堀の幅、渡し船の期間など当時の詳細な様子がわかる史料であると言える。また、6年後の1756（宝暦6）年には落雷により元和築城時の五重天守が焼失しており、天守焼失直前の絵図でもある。

永井期からの変化についてみていくこととする。内高嶋の西端には「古茶屋」の東に新たに池が出来ており、西には水車も描かれている。また、稲葉期の絵図にも水防林とみられる樹木が描かれており、これもまた松であると考えられる。阿部（1968）によると、「堀の兩岸に木をうえ、洪水のとき、堀と通りが一つになったときの目じるしにしていた」とあり、護岸を守る水防林以外の役割も果たしていたといえる。

4) 城下町の拡張と武家屋敷

城下町淀において最も大きな変化は、松平定綱から永井尚政に城主が変わる際に、毎年の洪水と家臣の住居不足解消のために行った、木津川の川違と武家屋敷を含む城下町の拡張であった。従来の研究では、淀城下町の拡張の際に新たにできた武家屋敷の軒数、その推移については検討されていない。そこで、松平期・永井期・稲葉期の各時代における武家屋敷の軒数と相対面積を求める。

図8は各時代における武家屋敷の軒数の推移と面積を示したものである。方法としてはGIS（ArcMap10）を用いて作成した松平期・永井期・稲葉期の各時代復原図を利用した。武家屋敷の軒数はデータ上の「武家屋敷」の軒数を集計し、面積は絵図により縮尺や描き方などの違いにより微妙に変化すると考えたため、3葉にほぼ共通する天守台を基準とし、その面積に対しての相対面積を求めた。武家屋敷の中には名前の記載がないものもあったが、城下町における武家屋敷の推移を考察するため、空き家と思われる記載なしの武家屋敷も含んでいる。

図8をみると、松平期から永井期にかけて武家屋敷の軒数は約2倍に増えていることが分かる。また、相対面積の合計も城下町の拡大に伴い約1.4倍に増えている。次に永井期から稲葉期をみてみると、軒数はほぼ変化ないが相対面積は増加している。稲葉期には石高が10万2000石となり、武家人口が増えたため、広い武家屋敷や狭い武家屋敷の増大が必要であったと考えられる。そのため、相対面積が10%にも満たない武家屋敷の軒数が増加したと考えられる。

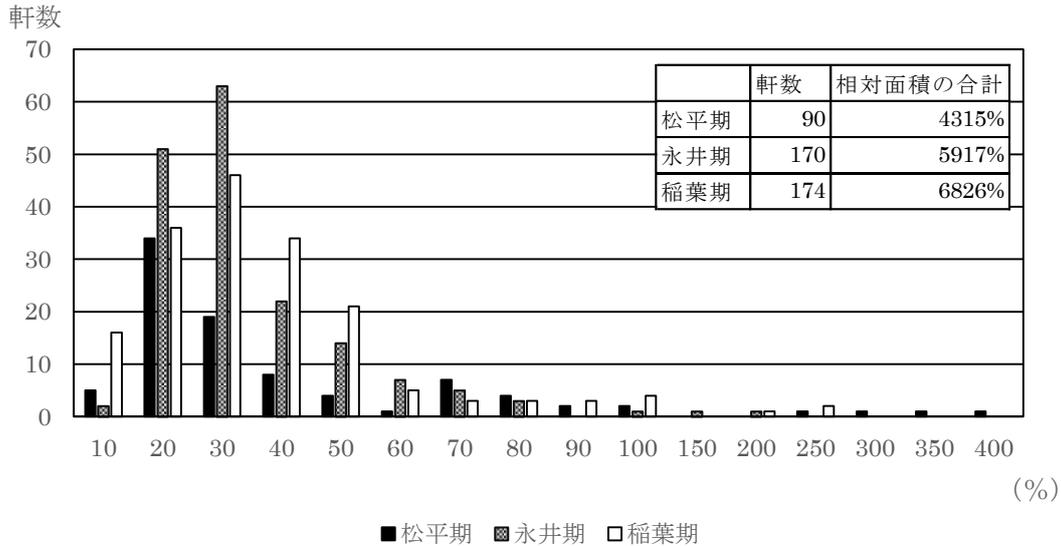


図8 武家屋敷の軒数と天守台に対する相対面積の推移
 (『山城淀城之図』, 『淀惣絵図』, 『山州淀府内之図』より作成)

IV. 城下町淀と河川

1) 城下町と河川との関わり

城下町淀において宇治川・木津川・桂川との関わりは切り離せない。河川にかかわる施設や洪水対策の工夫などを絵図よりみていく。

城下町淀でもっとも有名なのは淀の川瀬の水車である。永井尚政が淀城下町の拡張を行ったとき、外高嶋の西端に偕楽園という庭園を築き、そこに水車を設け城内に水を取り入れ茶会などを開いたという。この水車と偕楽園を造ったのは尚政の重臣である佐川田喜六昌俊といわれている。昌俊は文武の達人であり、偕楽園を造る際、尚政から一切任せると託されたという。

淀の地域は度重なる洪水により、周辺地域への被害が絶えなかった。そのため護岸目的の設備はいたるところにあった。2015(平成27)年8月24日から9月24日まで、京都府埋蔵文化財研究所によって実施された淀城の発掘調査によると、内高嶋の西端の本茶屋付近で、拳大や人頭大の石が敷き詰められている集石遺構が出土した。集石遺構が出土した地域は外堀と内高嶋、桂川が接する場所であり、護岸目的のためと推測されている。また、河川の流れを抑えるための設備が稲葉期の城下町絵図にみられる。図7の木津川と桂川の郷中地点付近に「蛇笠」(じゃかご)と呼ばれる、川に向かって突き出たものがある。「蛇笠」は竹を組みその内側に石を入れて造った堤防のようなものである。河川の流れが強い地帯に設置されており、京都大学建築系図書室所蔵の「淀城大絵図」にも同じように描かれている。

城下町淀には「雁木」と呼ばれる船着き場が数多くある。雁木は川に面した城下町特有のものであり、城下町にはいくつも存在していた。図5の永井期の絵図に本茶屋周辺など



写真 濱納屋
(2017年9月6日撮影)

の内高嶋に多く描かれている。淀は水郷であるため、城内にも大きな船入りが西の丸の西や最西端の茶屋近くにあったためと考えられる。城主の舟以外は水車に近寄るのを禁止していたという記録も残っており、城主専用の雁木もあったと推測される。

淀大橋より南には美豆村という集落があり、淀川や木津川を利用した商売が盛んであった。江戸時代木津川のそばに、「木田醤油」という醤油醸造の店があった。醤油などの重い商品は船を利用して大消費地である京都や大坂などに輸送されていた。醤油を造る大豆や小麦などの大量の原料は川岸にある「濱納屋」とよばれる倉庫に貯蔵した。また、できた樽詰めの醤油も貯蔵した(写真)。淀の地域は低湿であり豊富な水を確保でき、また交通の大動脈でもあった河川を利用することで効率的な輸送を可能にしていたことが推測できる。このような濱納屋

が当時は残っていたが、現在は木田醤油の前の一ヶ所のみしか残っていない。

V. おわりに

本稿では城下町淀の地理的分析を踏まえた上で、3葉の城下町絵図を用いて17～19世紀の淀城下町がどのような変化したのか、またその背景についてGISを用いた復原図をもとに様々な方法で分析してきた。この結果得られた知見を要約すれば以下の通りである。

江戸時代において淀藩は山城国唯一の藩であり、その位置は政治や軍事上、水陸交通における要所であった。また歴代藩主は親藩と譜代大名であり、藩主の移封はそれほど幕府が淀藩を重要視していたからだといえる。

城下町淀は松平定綱により造られ、永井尚政の時代に木津川の川違を含めた大工事を行い、武家屋敷や足軽長屋、町人町などの拡大により、定綱の時代より多くの家臣団の住居を確保した。この城下町の拡張により、淀城下町の骨格は完成することとなる。

3葉の絵図、「松平期」、「永井期」、「稲葉期」の城下町の復原図により、城下町淀の武家地や町人町などの土地利用が変化しない場所や変化した場所、各時代における特徴的な施設について復原できた。城下町の拡張における埋め立て地の構造、そして武家屋敷の軒数と天守台を基本とした相対面積を求めた。これにより松平期から永井期にかけては武家屋敷の軒数が約2倍に増えており、永井期から稲葉期をみると、軒数はほぼ変化ないが相対面積は増加していることが明らかとなった。これは稲葉期に石高が10万2000石となり、武家人口が増えたことにより、広い武家屋敷や狭い武家屋敷の増大が必要であったた

め、相対面積が10%にも満たない武家屋敷の軒数が増加したと考えられる。

淀城下町と河川の関係は密接であり、河川を利用した施設や産業が数多く存在している。特に毎年のように起こる洪水対策は重要な課題であり、それにちなんだ護岸工事や「蛇笥」（じゃかご）と呼ばれる堤防の存在などが絵図の記載や最近の調査などによって明らかとなった。

城下町の研究においてGISの利用は城下町絵図に描かれた情報をGIS上で電子化するだけでなく、位置情報の付与や武家屋敷の面積を求めるといったような様々なデータの集約・分析が可能であり、有効な手法であるといえる。GISを用いて淀城下町の復原を行うことで、淀城下町の詳細な変化を分析することができた。このような詳細な景観の復原は、現代の淀の地域を理解することにも適していると考えられる。

—付記—

本校を作成するにあたり、京都大学建築系図書室、京都市埋蔵文化財研究所の内田好昭氏、淀観光協会の浅井均氏、森口健吾氏、稲葉神社崇敬会の辻長治氏、渡辺辰江氏、淀南地誌の会の木田明氏にはお忙しいなか大変お世話になりました。ここに記して厚く御礼申し上げます。

—参考文献—

- ・阿部宏 1968. 淀城と「山城淀御府内図」について. 大阪市立博物館研究紀要 1: 61-63.
- ・木村礎・藤野保・村上直編 1989. 『藩史大事典第4巻中部編2 東海』雄山閣出版.
- ・木村礎・藤野保・村上直編 1989. 『藩史大事典第5巻近畿編』雄山閣出版.
- ・久御山町史編纂委員会編 1986. 『久御山町史第1巻』久御山町.
- ・小林大祐 1988. 近世淀城下町の成立とその変容—近代淀川河川改修工事資料を用いた復元考察—. 日本建築学会近畿支部研究報告集 計画系 28: 865-868.
- ・中島三佳編 1986. 『東海道五十七次 京街道四宿 守口・枚方・淀・伏見—大津』中島三佳.
- ・西川幸治編 1994. 『淀の歴史と文化』淀観光協会.
- ・原田伴彦編 1976. 『日本都市生活資料集成4 城下町編II』学習研究社.
- ・尾留川正平編 1973. 『日本地誌14 京都府・兵庫県』二宮書店.
- ・野外歴史地理学研究所編 1983. 『琵琶湖・淀川・大和川—その流域の過去と現在—』大明堂.
- ・淀城温故会編 1934. 『淀城温故会第九回報告』淀城温故会.
- ・淀南地誌の会 2014. 『淀南の歴史』淀南地誌の会.